

布野修司

Shuji FUNO

### はじめに

『近代世界システムと植民都市』（京都大学学術出版会）を上梓（2005年2月）して、次の目標となるのは、その「あとがき」に記したように二つの方向である。一つは現代都市とりわけ植民都市を基礎として巨大都市に発展した都市をフィールドワークに基づいて解明する方向、もう一つは、オランダ植民都市以前（17世紀以前）の各地域における都市の伝統を明らかにする方向である。本稿では、後者の方向の作業として、インド的都城の伝統を日本ではあまり知られてこなかったミャンマーについて概観したい。これまで、チャクラヌガラ（ロンボク島、インドネシア）、ジャイプル、マドゥライ（インド）について詳細調査を展開してきたが、東南アジアの都市の概観を加えて、この3都市を核に一書にまとめられればと思う。

東南アジア地域の「インド化 indianization」が開始されるのはおよそ紀元前後のこととされる。「インド化」とは、インド世界を成り立たせてきた原理あるいはその文化が生んだ諸要素、具体的には、デーヴァ・ラージャ devaraja（神王）思想、ヒンドゥー教・仏教の祭儀、プラーナ Purāna 神話（ヒンドゥー教の聖典）、ダルマシャーストラ（ヒンドゥー教の法典）、サンスクリット語、さらに農業技術、建築技術・・・などが伝播し受容されることをいう。最初に「インド化」という概念を提出して東南アジアという地域とその歴史に枠組みを与えたのは G. セデス（1886-1969）である<sup>1</sup>。また、G. セデスと並ぶ東南アジア古代中世史の開拓者であるインドネシア古代史の N.J. クロム Krom（1883-1945）も、「インドネシア群島の歴史はインド人の渡来をもって開幕する」という<sup>2</sup>。「インド化」がはっきり表面化するのは4～5世紀頃<sup>3</sup>で、さらに7世紀から13世紀にかけて東南アジアは、インド文明とりわけヒンドゥー教によって席卷された。

「インド化」以前の東南アジアには、水田稲作、牛・水牛の飼育、ドンソン青銅器文化、鉄の使用、精霊崇拜、祖先信仰・・・など、ある共通の基層文化が存在してきた。G. セデスは、それを「先アーリヤ文化」と呼ぶが、その段階でもインド亜大陸と東南アジアとの頻繁な交流はあり、例えば、水牛はインド東部で家畜化されて伝来した可能性が高い。インド文化の諸要素の伝来については、インド亜大陸の先住民であるオーストロアジア語族系集団がアーリヤ人の進入とともに移動し、その文化を東南アジアにもたらしたという説が有力である。この G. セデスの「インド化」あるいは「インド化された国家」をめぐるのは、C. ギアツの「劇

1. George Coedès, "Les états hindouisés d'Indochine et Indonésie", Paris, 1948, 1964, 1968. "The Indianized States of Southeast Asia", East-West Center Press, Honolulu, 1968

2. クロム N.J., 『インドネシア古代史』、有吉瀧編訳、道友社、1985年

3. G. セデスは「第二次インド化」という。

4. Tambiah, S.J., "World Conqueror and World Renouncer", Cambridge University Press, 1976

5. 矢野輔、『東南アジア世界の論理』、中央公論社、1980年

6. 桃木至朗、『歴史世界としての東南アジア』、山川出版社、1996年

7. 最初期のヒンドゥー諸王国（～4世紀中葉）、2度目のヒンドゥー化（4世紀中葉～6世紀中葉）、扶南の解体（6世紀中葉～7世紀末）、シュリーヴィジャヤの発展・カンボジャにおける分離・シャイレンドラ王朝の出現（7世紀末～9世紀初頭）、アンコール王朝の建設・スマトラのシャイレンドラ王朝（9世紀初頭～末）、アンコール王朝とシュリーヴィジャヤの隆盛（9世紀末～11世紀初頭）、三人の大王：カンボジャのスールヤヴァルマン1世・ジャワのAILランガ・ビルマのアノラタ（11世紀初頭～1075年）、カンボジャのマヒダラブラ王朝・ビルマのパガン王朝・ジャワのクディリ王朝（1100～1175年）、カンボジャの最盛期・ビルマにシンハラ仏教導入・ジャワのシンガサリ王国（1175～1266年）、蒙古人の征服（13世紀末）、ヒンドゥー諸王国の衰微（14世紀前半）、ヒンドゥー諸王国の終焉（ポルトガルのマラッカ占領（1511年）まで）と時代を追っている。G.セデス、『東南アジア文化史』、山本智教訳、大蔵出版、1989年

8. 千原大五郎、『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』、鹿島出版会、1982年。

9. Anthony Reid, "Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680 Volume Two: Expansion and Crisis", Yale University Press, 1993. アンソニー・リード、『大航海時代の東南アジアII 拡張と危機』、平野秀秋・田中優子訳、法政大学出版会、2002年。

10. 16世紀における主だった都市として挙げられるのは、アユタヤ、ベグー、マラッカ、バサイ、ブルネイ、デマ（ドゥマツ）、グレシクである。また、17世紀について、加えて挙げられるのが、タンロン、キムロン、フエ、ブノンベン、パガン、パタニ、ジョホール、アチエ、バントゥン、マタラム、スマラン、ジュバラ、トゥバン、スラバヤ、マカッサルなどである。都市の規模については信頼性の薄い出典も多いが、16世紀にはタンロン、ベグー、そしてアユタヤが10万人規模の都市であったとされる。そして、マタラムも含めて17世紀中葉には15万から20万人に達したと考えられる。

場国家論」やO.W.ウォルターズの「マンダラ論」、さらにS.J.タンバイヤの「銀河系政体論」<sup>4</sup>、矢野暢らの「小型家産国家論」<sup>5</sup>など、様々な議論がなされてきている<sup>6</sup>。

王権のかたち、歴史のフレーム、さらに細かく、カースト制は何故東南アジアには伝えられなかったかなど、東南アジアの「インド化」をめぐる議論は興味深いですが、ここで焦点とするのは都市の形態である。すなわち、都市のかたち、その空間のあり方と「インド都市」との関係、インド的都城の理念の移入、受容がここでのテーマである。

『アルタシャーストラ』や『マーナサーラ』などが理念化するインド的都城の形態をそのまま実現したと考えられる例は、インドにおいては、シュリーランガム、マドウライ、ジャイプルを除くとほとんどない。しかも、シュリーランガムにしても、マドウライにしても、今日確認できる形態は15世紀以降の建設である。ジャイプル、チャクラヌガラは18世紀初頭の建設である。インド最初の統一帝国を打ち立てたマウリヤ王朝の首都パータリプトラが栄えた時代、すなわち、チャンドラグプタ王の宰相カウティリヤが『アルタシャーストラ』を書いた時代の後は、シルカップのような事例以外、発掘調査の遅れや文献の偏りもあって、13世紀に始まるムスリム支配期以前に遡って都城の展開をたどることはできない。

そうした意味で、インド的都城の理念を窺うために7世紀から13世紀についての東南アジアは極めて興味深い。すなわち、支配の正統性を都城の形態として表現の必要性は、その理念を生んだ王権の中核よりは周辺において必要とされる、というテーゼを確認する意味で東南アジアは注目されるだろう。G.セデスは、「インド化」の各地域における様相を時代毎に輪切りにしながら<sup>7</sup>、各地の碑文、文献の記述を照合している。そしてさらに、ここで手掛かりとなるのは都市遺構であり、千原大五郎<sup>8</sup>は、このG.セデスの時代区分を下敷きにしなが、東南アジアに残る都市遺構、建築遺構を総覧しているが、現存する7世紀以前に遡るヒンドゥー建築、都市の遺構はほとんどない。また、都市の理念を詳細に明らかにできる事例はそう多くはないし、各都市は時代毎とともに大きく変遷してきている。

13世紀半ば以降、東南アジアを席卷してきた「インド化」の流れ、「サンスクリット文化」は勢いを失う。代わって、支配的になるのは南方上座仏教である。これを「シンハラ（シンハラ）化」と呼んで「インド化」と区別する主張もあるが、上座仏教も大きくはインド化の一環である。ただ、明らかに担い手の交代があり、13世紀半ばからの一世紀をG.セデスは「タイ人の世紀」と呼ぶ。注目すべきは、この転換と、元（大元ウルス）の東南アジアへの侵攻が連動していることである。ユーラシア全体に及んだこの「モンゴル・インパクト」は、「世界史」を成立させることになるが、東南アジアもモンゴル・システムに巻き込まれることになる。単に、タイ人に主導権が移行したということにとどまらないのである。

そして、アンソニー・リード<sup>9</sup>のいう「交易の時代」が次の区切りになる。アンソニー・リードは、15世紀末から17世紀にかけての「交易の時代」に先立って東南アジア各地に存在した都市について、諸文献を整理してまとめている<sup>10</sup>。ここに挙げられる諸都市が検討の対象となる。内陸の都市であれ港湾都市であれ、こうした東南アジアの都市の構造は基本的に同じであり、宇宙の構造を映すべく建設されたものだとA.リードはいう。そうし

た「宇宙の構造を映すべく建設された都市」がミャンマーのペグー Pegu(Bago)、アヴァ Ava (インワ Inwa)、アメラプラ Amerapura、マンダレー Mandalay である。

## 1 シュリークシェートラ

中国の史書に依れば、2世紀頃のエーヤーワディ Ayerarawady (イラワディ) 河流域には北にピュー Pyu (驃)、南にタン(掸)という国が存在した。ピューは1世紀頃から存在が確認されるが、7世紀以降はエーヤーワディ河流域一体を勢力圏においたと考えられている。ピューとフナンは5世紀以前から交易関係を持っていたことが知られている。また、ドゥヴァーラヴァティーは7世紀初めにエーヤーワディ流域南部に勢力を伸ばしている。

ピューの遺跡として、シュリークシェートラ Sri Ksetra(タイエーキッタヤー Thayekhittaya、室利差咀羅、現プローム市)をはじめ、中央平原地帯のベイタノ Beikthano、ハリンジー Hanlin、マインモー(マイミョー)などが知られる。いずれも、円形もしくは楕円形の煉瓦造の城壁で囲われ、中心に王宮が置かれている。こうした遺跡からは共通にピュー文字碑文、ビーズ、銀貨、石製もしくはテラコッタ製の壺が出土している。また、主要な遺跡からは菩薩像、ヒンドゥー神像なども出土し、ヒンドゥー教、仏教が信仰されていたことが知られる。ピューの城郭都市の経済を支えたのは、塩田と低湿地群周辺での稲作であったと推定されている<sup>11</sup>。

エーヤーワディ河中流域を中心に栄えたピュー以降、ビルマ(ミャンマー)史は、統一王朝として、アノーヤター王によるパガン王朝(1044～1287年)、パインナウン王によるハンサワティ=ペグー王朝(1287～1539年)、アラウンパヤー王によるコンバウン王朝(1752～1885年)<sup>12</sup>の創始が大きな区切りとされている。加えて、インワ王朝(1364～1526年)、タウンゲー王朝(第1次1486～1599、第2次1597～1752年)が主だった王朝である。ビルマでは、パガン、タウンゲー、コンバウン朝をそれぞれ第1、第2、第3帝国と呼ぶことが多い。

パガン王朝がモンゴルの侵略によって滅亡すると、エーヤーワディ河流域は諸王国、諸王朝が群雄割拠する状況となる。諸王朝の拠点となった都市を挙げると以下のようなものである。

サガイン Sagain (1315-64, 1760-64)

インワ Inwa (アヴァ Ava) (1364-1555, 1629-1752, 1765-1783, 1823-1837)

タウンゲー Taungoo (1486-1573)

シュエボー Shwebo (1758-1765)

コンバウン Konbaung (1783-1823, 1837-1857)

マンダレー Mandalay (1857-1885)

1885年にビルマ王国は滅亡し、1886年に全土が英領インド帝国へ編入されることになる。

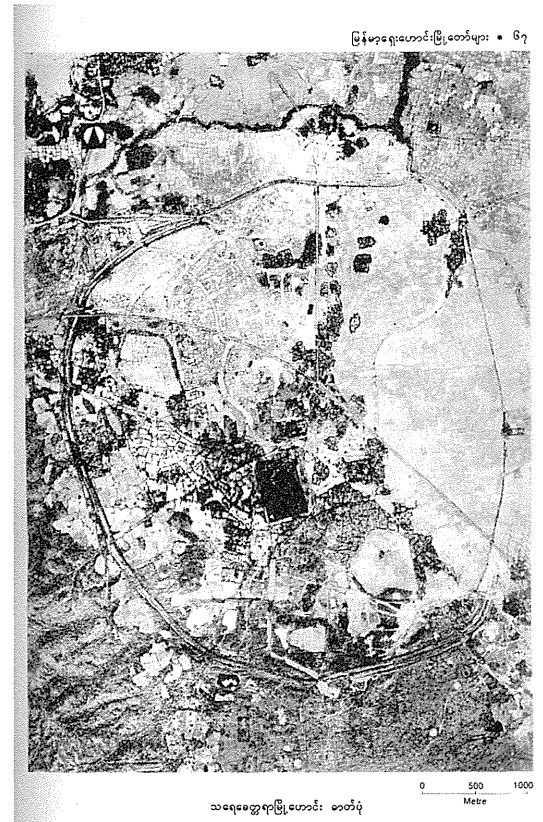


図1 シュリークシェートラ 航空写真

11. 伊東利勝、「綿布と旭日銀貨ーピュー、ドゥヴァーラヴァティー、扶南」『岩波講座 東南アジア史』1『原史東南アジア世界』、岩波書店、2001年

12. 歴代の王は以下のようである。Alaungpaya 1752-1760、Naungdawgyi 1760-1763、Hsinbyushin 1763-1776、Singu Min 1776-1782、Bodawpaya 1782-1819 (マラプラ遷都建設 1783)、Bagyidaw 1819-1837 (インワ復都 1823)、Tharawaddy Min 1837-1846、Pagan Min 1846-1853、Mindon Min 1853-1878 マンダレー遷都建設 1857、Thibaw Min 1878-1885。

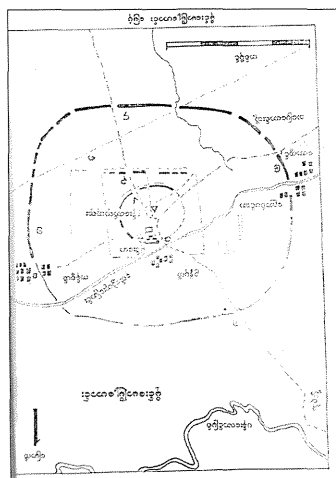


図2 マインモー

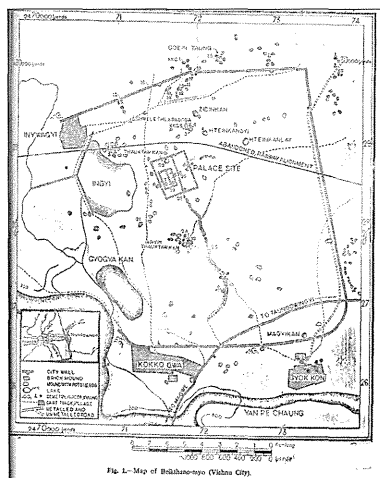


図3 ベイタノ

シュリークシェートラは東西経4キロ、南北経5キロ程で、ピューの都市遺構としては最大規模を誇る(図1)。ビルマの年代誌は、シュリークシェートラにはインドラ神などの神々によって須弥山の上に32の門をもつ都市が建設されたと伝えており、遺構は、その宇宙観を象るかのように円形をしており、多くの門が確認されている。32の門は32の属領に対応するもので、32人の封臣に囲まれて、その中心に王が住んでいたことを示唆する、という説がある。

その他、ベイタノ(1~5世紀 図3)、ハリンヂー(3~9世紀)、マインモー(2世紀後半~6世紀末)(図2)などには、インドとの関係を窺わせるストゥーパなど建築遺構が残されている。例えば、ベイタノ遺跡には南インドのアーンドラ朝(c.紀元前1世紀~紀元3世紀)の影響があるとされる。また、シュリークシェートラ遺跡にはアマラーヴァティー地方、あるいはベンガル、オリッサ地方の影響がうかがえるパゴダが残されている。

ビルマ西北部、ベンガル湾沿岸に古くからのインド化国家ダニャヴァティー Dhanyawady (~6世紀)が知られる。ラカイン(アラカン)族の支配域で、ヴェサリ Vesali (Wethali 4~9世紀)、ムラウー Mrauk U (ミョハウン)(13~18世紀)を拠点としていたと考えられている。ダニャヴァティー、ヴェサリの遺構は王宮を中心に市街を丸く囲む形態をしている<sup>13</sup>。こうした、初期の円形都市の系譜は、方形の都市の系譜へ転じていくように思われる。

13. Pamela Gutman, "Burma's Lost Kingdoms Splendours of Arakan", Orchid Press, 2001

## 2 パガン (バガン)

9世紀から10世紀にかけて、ビルマ人がエーヤーワディ川流域に南下してくる。ビルマ語の南北を指す言葉が、南=山、北=川下を意味することから、ビルマ族の原郷は現在のミャンマーではないと考えられている。山とはヒマラヤであり、北に揚子江あるいは黄河が流れている地域が母地と考えられる。中国史料が蕃夷という氏羌(ていきょう)族はチベット・ビルマ族系の諸民族とされる。

黄土高原に居住していた氏羌族は、漢民族との抗争に敗れ、南下して730年に統一国家「南詔」を建てる。この南詔がビルマ族の祖先に関係すると考えられている<sup>14</sup>。

南詔の圧政を逃れてきたビルマ族の最初の入植地はチャウセイ、第二の入植地はミンブーと

14. 大野徹、「パガンの歴史」(岩波講座『東南アジア史』2「東南アジア古代国家の成立と展開(10-15世紀)」、岩波書店、2001年)。以下のパガンの歴史についての記述は、この大野論文に多くを負っている。

される。

彼らはヤカイン kaing と呼ばれる「四角い村」<sup>15</sup>を建設する(図4)。ヤカインとは、単一首長のもとの地域、国を意味し、その中心には城壁都市を置いた。そして、ビルマ族がうちたてたのがパガン王朝(11～13世紀)である。ビルマの最初の統一王朝とされる。クメール、ジャワと並んで、パガンは、東南アジアにおけるヒンドゥー・仏教の三大中心となる。

パガン朝の創始は2世紀初頭とする伝承もあるが、ピュー族、モン族を攻略したのが9世紀前半であるからそれ以前には遡らない。それ以前には、土地神であるナツ Nat を崇拝する村落が連合し、次第に国家が形成されていたと考えられている<sup>16</sup>。パガンの南東20 kmに第一の王宮ヨンリーチュン Yon HllitKyun (2～4世紀)があり、現在のパガン・ミョシット(ニュー・パガン)に第二の王宮(4～6世紀)、第三のタンパワディ王宮(6～8世紀)もパガンの南東近郊に比定されている(図5)。

最盛期を迎えたのは、実在が確認できるアノーヤター Anawratah 王(ア Niludda、在位1044～77年)以降の250年間である。1287年のモンゴル侵入による滅亡まで11代の王が確認されている。パガン朝の歴代の王らが造営した堂塔の数は5,000にも及び今日なお2,000を超える遺構が残っている。上座部仏教がパガン朝の中心であるが、8世紀以前には大乘仏教の影響が強く、さらにピュー族以来のヒンドゥー教の影響も色濃かったとされる。アノーヤター王は大乘仏教徒であった可能性が高い<sup>17</sup>。シン・アラハン

によって上座仏教がもたらされるが、アノーヤター王は彼のためにタートン(タートン)を攻撃して經典を手に入れたというエピソードがある。しかし、これは後代の物語とされ、三代目のティライン(チャンシッター、在位1084～1113年)が自らをシュリークセトラの系譜に属するとし、ヴィシュヌの化身であるとしたように、ヒンドゥー教、大乘仏教の影響は強かったとされる。現存する寺院としては、シヴァ神を奉るナスラウング・チャン Nathlaung Kyaung 寺院が唯一のヒンドゥー寺院である。ヴィハーラの遺構としてはソーミンディ、タマニ、アマナなどがあるが、中庭を囲む方形平面の基本型がある。

パガン朝の建築は、一般的に、北インド式の、すなわちシカラ風の、高塔を頂く。千原大五郎は、パガンの建築様式を以下のように4期に分けている。

ピュー様式期： 10世紀中葉からアノーヤター王のタートン征討まで。ブーパヤー、ナッフラウン・チャウンなど。

初期モン様式期：1057-1084。ミンカパー、シュエサンドー、シュエズィゴンなど。モン人が移入してきたこの時期、11世紀中葉にいわゆるビルマ型のパゴダが成立している。

モン様式期： 1084-1113、チャンシッター王治世期。アーナンダー・パトなど。

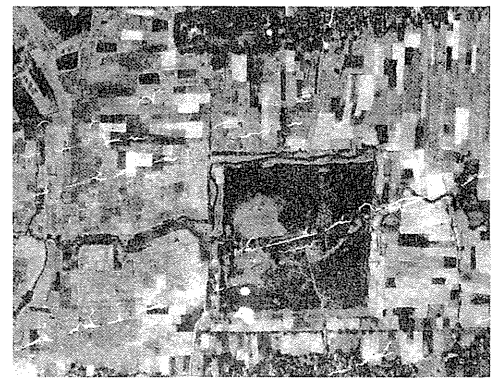


図4 ヤカイン 航空写真

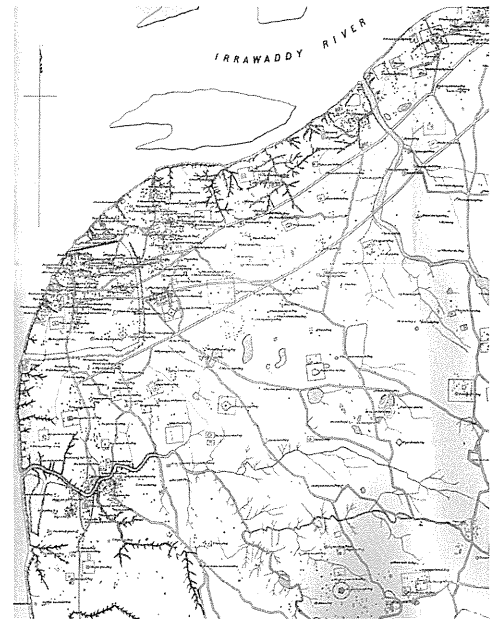


図5 バガン

15. もちろん、「四角い村」のみではないが、極めて整然と計画されるのが特徴である。

16. バガンの南東50kmにミャンマーのナツ信仰の本山ボバ山がある。

17. バガン朝の王権思想については、伊東利勝、「バガン朝初期における王権の正統化思想」(角田文衛/上田正昭監修・初期王権研究委員会編、『古代王権の誕生II』、角川書店、2003年)が、碑文の読解を示している。

ビルマ様式期： 1131-1287。アラウンシードゥー王治世（1113～1167）からパガン陥落まで。シュエグージー、スーラーマニなど。

現在のバガンに林立するパゴダ（ゼディ）からかつての繁栄を偲ぶことができるがその都城の形態は明らかでない。現在も王宮跡地の発掘が続けられている。残されている東の正門サラバル門は1090年頃の建造だという。城壁は、北が500m、東が1km、南が1.1kmほど残っている。高さ2.4m、厚さ3.5mの城壁の外側には幅50mの濠が廻らされている。大きく湾曲しており、計画性はあまり感じられない。というより、歴史的に破壊、修復、補強を繰り返したと見るべきであろう。イラワディ川に接する西側は流れの変化に応じて変化を被ったことが考えられる。興味深いのは、東と南に3つの門、北に2門が残っていることである。西門はイラワディ川に面し、しかも現状では西側城内は大きく欠損しているが、推定できるのは各辺3つずつ12の門をもつ構成であったことである。王宮跡地もがほぼ中央に位置している。その理念を窺うためには、発掘成果を待たねばならないが、後に見るアマラプラ、マンダレーと同様の構成であった可能性が高い。

### 3 ペグー

パガン朝がクビライ・カーンの元軍に敗れて滅亡すると、中央平地帯の各所にミョウ mrujw と呼ばれる城市が成立し始める。このミョウの構造と機能は、同時代のメナム盆地のムアンに似ているという<sup>18</sup>。カヤインあるいはウィエンとの関連も興味深い。ウィエンは、モン族の伝統とされるのである。ピュー族とともに、下ビルマにインド化以前から先住していたのがモン族（タライン族）である。タトゥン Thatôn（7～10世紀）、ペグー Pegu、ダゴン Dagon（ラングーン）などを拠点とするラーマンニャ・デーサなどモン人国家が成立していたことが中国史料やパーリー語年代記によって確認されている。

パガン朝の終末と平行して、エーヤーワディ下流域のモッタマ・ミョウに、スコータイ王の後ろ盾によってワーレルー Wareru 王（1287～96年）が政権を樹立する。王朝はチェンマイ、スコータイ、アヨー

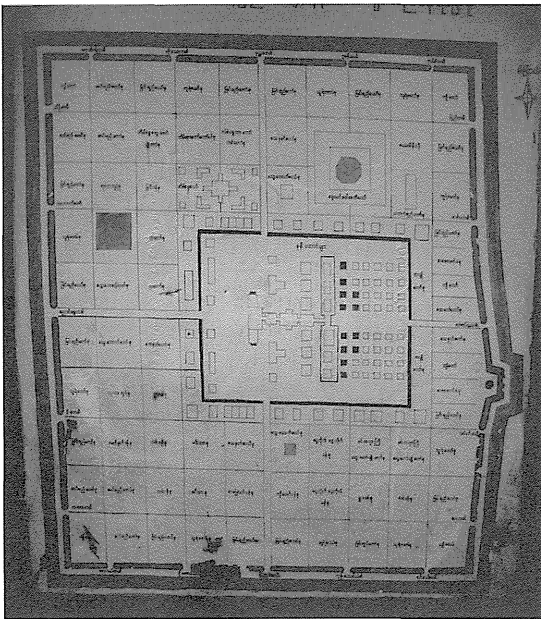


図6 ペグー 復元図

18. 伊東利勝、「エーヤーワディ流域における南伝上座仏教体制の確立」(岩波講座『東南アジア史』2「東南アジア古代国家の成立と展開(10-15世紀)」、岩波書店、2001年)。

19. 以下の歴史的叙述は、主として、Aung Thaw, "Historical Site in Burma", The Ministry of Union Culture, Government of the Union of Burma, Sarpay Beikman Press 1972 による。

ドヤの脅威を受け続け、1369年に都をペグー(ハゴー)に移す。伝説に依れば、ペグーの起源はハンサワティ Hanthawady (ハンターワディ Hamsavati) という町である<sup>19</sup>。白鳥が浅瀬の小さな土地に飛来したことに由来する。現在その地には、ヒンサゴン・パヤが建てられている。モン族が居住し始めた当初の町にはインドからの移住者が多く含まれており、この土地をウッサ Ussa と呼んだという。彼らはオリッサと関係があったと考えられる。825年頃、タトゥンからタマラとウィマラという2人の兄弟のモン人僧がやってきて最初の都市が造られたという。

後期モン王朝とも呼ばれるハンサワティ=ペグー王朝(1287-1539年)の間、ペグーは

南ビルマを東ねたモン族の王都として栄えた。ラーザーディリ Rajadartit(1385-1423)、シンソーブ Shinsawbu(1453-72)、ダンマゼーディー Dammaceti(1472-92)などの諸王のもとで上座仏教体制が確立されるのである。この時代の市壁がシュエモードー・パヤの東に残されている。

ペゲーは、1539年にタビンシュエーディ Tabinshweti 王によってタウンゲー王国に服属させられ、再びビルマ族の支配下に置かれる。上ビルマをシャン人が支配する中で、スィッタ川上流域に勃興したのがタウンゲーで、ミンチーニョウ（在位 1486～1531年）が王朝を建て、ダビンシュエーディがそれを継いだ。次の第三代バインナウン Bayinnaung 王が 1566年に新都を建設し、ハンサワディと名づけた。この新都が極めて理念的に設計された王都として知られるペゲーである（図6）。

ただ、このハンサワティの遺構は、古い濠を廻らした城壁の跡以外に現存しない。シュエモードー・パヤは古い伝承をもつが、歴代の

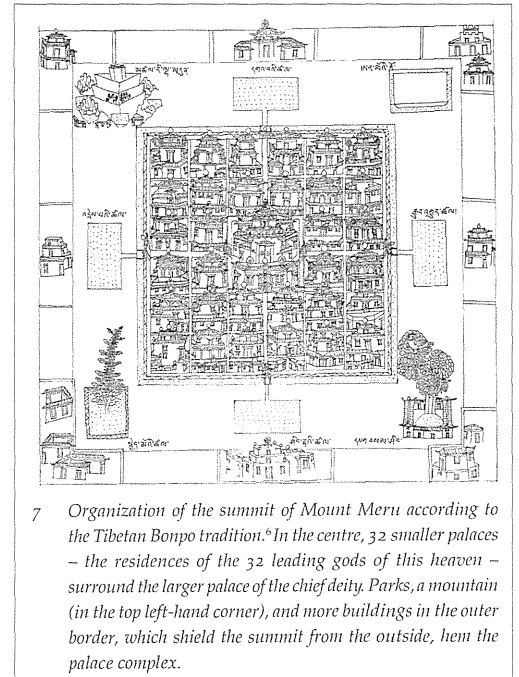
統治者がしばしば増拡を繰り返してきた。現在のものは 1954年のものである。また、994年の創建という横臥仏（寝仏）シュウエタリヤウング・ブツダが著名であるが、現存するのは 1906年建設である。しかし、近年発掘が行われつつあり、バインナウン王が建設した王宮の復元も行われた。下ビルマの歴史都市の中でも、明快な理念を確認できるのがバインナウン王によるハンサワディである。

15世紀半ば以降、ペゲーの地を多くの外国人<sup>20</sup>が訪れ、記録を残しているが、16世紀中葉（1567年）にペゲーを訪れたヴェニス商人カエサル・フレデリックは、バインナウン王の下で新しく建設された都市について次のように書いている<sup>21</sup>。

「新しい都市には王宮と直臣、貴族などの居住地がある。私の滞在中に、彼らは新都市の建設を終えた。巨大な、極めて平らかな、正方形の都市である。城壁で囲われ、その回りに濠が廻らされていて、鰐が放たれている。橋はないが、各辺5つずつ計20の門がある。・・・街路は私の知る限り最も美しく、門と門の間を真っ直ぐに繋いでいる。一方の門の前に立てば他方が見渡せ、10人から12人が並んで騎乗できるほど広い。・・・王宮は都市の中心にあって城壁で囲われ、さらに濠が廻らされている。」以上から、新しく建設されたペゲーは6×6の分割パターン、『マーナサーラ』というウグラピータ Ugrapitha を基礎にしていたことが明らかである<sup>22</sup>。

また、もうひとつ考えられるのは、タウンゲーがモデルになっていたことである。タウンゲーは極めて整然とした矩形（正方形）をしている。分割のパターンは明確化できないが、東西南北に門を持つ形式（ダンダカ）である。タウンゲーの都市理念について、まず考えられるのは、「四角い村」ヤカインの伝統である。そして、インド的な都城理念の影響である。

全36区画から中央の王宮の4区画を引くと32となる。この32という数字、中央の1を



7 Organization of the summit of Mount Meru according to the Tibetan Bonpo tradition.<sup>20</sup> In the centre, 32 smaller palaces – the residences of the 32 leading gods of this heaven – surround the larger palace of the chief deity. Parks, a mountain (in the top left-hand corner), and more buildings in the outer border, which shield the summit from the outside, hem the palace complex.

図7 メール山の頂上の組織

20.21. V.C. Scott O' Connor, "Mandalay and Other Cities of the Past in Burma", 1987. 原著は 1907年に出版されたものである。

22. Karbawzathaci 王宮博物館の復元図によると各辺5門が均等に配置されていない。また、王宮の規模が極めて巨大である。具体的な都市設計については、さらなる発掘の成果を待つ必要がある。

23. 定方晟、『インド宇宙誌』、春秋社、1985年。

24. 定方晟、『須弥山と極楽』、講談社新書、1992年。

足して33という数字は、偶然ではないであろう。上座部系仏教において、メール山（須弥山）の頂上に住むとされる神々が33である<sup>23</sup>。東南アジアでは、33は、家臣や高官の定員数として、あるいは王国を構成する地方省の数としてしばしば登場する数とされている

(図7)<sup>24</sup>。ペゲーがその宇宙観に基づいて首都を建設したのは明らかである。

バインナウン王の死後、王朝は衰退し、第四代ナレースエン（在位1581-99年）の代で崩壊する。第1次タウンゲー朝は一世の命であった。新都は半世紀もたなかったことになる。1740年にモン族が蜂起し、ペゲーを再び首都とするが、1757年にアラウンパヤー Alaungpaya 王によって完全に破壊されてしまう。アラウンパヤー王は上ビルマの王となり、1852年の英国への服属までアヴァの支配下に置かれる。ボードパヤー王(1782～1819年)によってある程度再建されるが、バゴ川の流れが変わり、港の機能を失うとともにペゲーはかつての栄光を失うことになった。

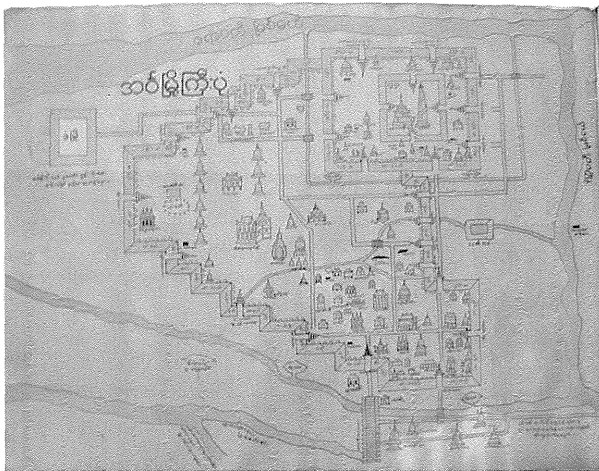


図8 インワ 絵図

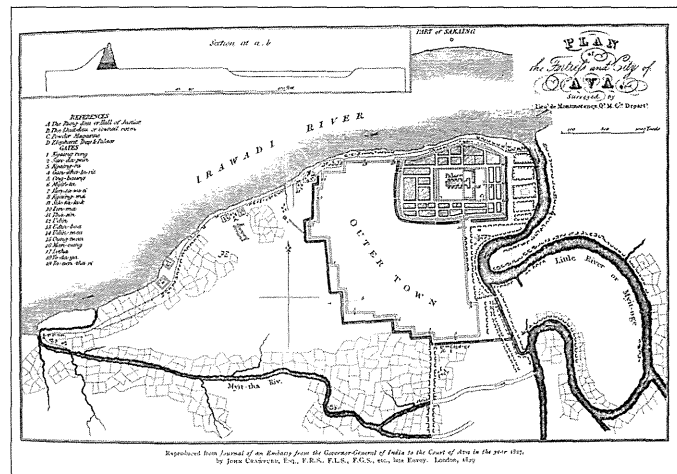


図9 インワ

#### 4 インワ（アヴァ）

タウンゲー朝の再興は、ニャウンヤン（在位1604～06年）によってなされる。彼は古都インワに新たにミョウを建設し（1597年）、新都とする<sup>25</sup>。

インワ（アヴァ）<sup>26</sup>は、もともとサガインを拠点としたシャン族によって築かれた都市であるが、1364年にビルマ族の王都となり、以降400年にわたって王都であり続けた。ただ、ここでも多くの攻防があり、棄都、遷都が繰り返されている。インワが最終的に放棄される大きなきっかけになったのは1838年の地震である。王都は大きく破壊され、1841年に遷都が決定されたのである。

インワは、北はイラワディ河、東はミットウゲ Myitnge 川によって区切られている。ミットウゲ川はもともと人工の運河で、インワは運河に囲われた水都である。インワとはシャン語でインレイ In-Lay「湖への入口」という意味である。物資の集散する要衝の地に位置し、雨期には船でしか行き来できない独立性の高い島となる。アユタヤに似ている。

かつてのインワは、現在では大半が耕地と化している。残された遺構もマハー・アウンミエー・ボンザン僧院と珠玉の木造僧院バガヤ・チャウンぐらいである。ただ、濠と城壁の跡は確認

25. ニャウンヤン朝とも呼ばれる第2次タウンゲー朝（復興タウンゲー朝）の歴史は、奥平龍二、「ペゲーおよびインワ朝からコンバウン朝へ」（岩波講座『東南アジア史』3「東南アジア近世の成立（15-17世紀）」、岩波書店、2001年）がまとめている。

26. 外部に対してはアヴァとして知られていた。パーリ語ではラトナプラ Ratnapura と呼ばれ、ヤダナボン Yadanabon と発音される。「宝石の町」という意味である。



できる。

興味深いのは、まず、各辺2門をもつグリッド・パターンをしていることである。東西が長い長方形をしているけれど、インワがバガン、トゥングー、ペグーの都市理念を引き継いでいることは明らかであろう。

また、城郭二重の構造が明確に窺えることも興味深い（図8, 9）。北東の角に城塞が置かれ、その中央に王宮がある。そして、市街はジグザグの市壁と濠でさらに囲まれている。このジグザグの形態は、ビルマの他の都市には見られない。南北は対称になっており幾何学的である。市街といっても、水田ないし池、あるいは運河網である。基本的にインワは水利都市、水生都市であり、郭壁は水の制御のために設けられたものである。

## 5 アマラプラ

第2次タウンギー朝は、タールン王（在位 1629～48年）の死後衰退を始め、最終的にはペグーを拠点とするモン人勢力によって1752年に滅亡する。その年、モーソーボー（シュエボー）の首長であったアウンゼーヤがペグー軍を退け、自ら王であることを宣言、アラウンパヤーを名乗った。コンバウン朝（1752～1885年）の成立である<sup>27</sup>。

アラウンパヤー以下、コンバウン朝の王たちは「ビルマ世界」の実現を目指した。「ビルマ世界」とは、地理的には、東はベトナム、西はインド、北はアッサム、南はスリランカに至る世界である。歴代の王はその世界の征服を目指して征服行動を繰り返した。

「ビルマ世界」構想を支えたのは、仏教の宇宙観である。アラウンパヤー王、シンビューシン王、ボードパヤー王は、支配の正統性を主張するために自らを転輪聖王を名乗った<sup>28</sup>。

その首都は転輪聖王の支配する宇宙の中心に位置するものでなければならなかった。

アマラプラは、ボードパヤー Bodawpaya 王によって1783年に建設される。1823年にバジドー Bagyidaw によってインワに王都が戻されるが、1841年に再び王都となる。そして、ミンドン・ミン王によってマンダレー遷都が決定され、1860年に完了する。アマラプラの王宮の木造建造物はマンダレーに移築され、残っていない。アマラプラは「不死の都」という名にも関わらず短命であった。

その都市形態は、残された地図に依れば、理念をそのまま具現するように、極めて整然としている。そして、そのことは王宮の北にあった寺院マ・パ・チェ・パヤ Ma Pa Khet Paya に残された地図からも確認される。各辺3門、大きくは $4 \times 4 = 16$ のブロックに分割され、さらに各ブロックは $3 \times 3 = 9$ のナインスクエアに分割されている。従って、全体は $12 \times 12 = 144$ の区画からなる。中央の王宮は、そのうち、東西 $4 \times$ 南北 $5 = 20$ 区画を占めている。北東、南東、北西、南西の4隅にはそれぞれパヤ（ツェディ）が置かれている。

現在復元中のマ・パ・チェ・パヤに残された地図に依れば、王城内の

27. 岩城高広、「コンバウン朝の成立—「ビルマ国家」の外延と内実—」（岩波講座『東南アジア史』3「東南アジア近世の成立（15—17世紀）」、岩波書店、2001年）。

28. 渡辺佳成、「ボードパヤー王の対外政策 n i t u i t e e—ビルマ・コンバウン朝の王権をめぐる一考察—」、『東洋史研究』第46巻3号、1987年。

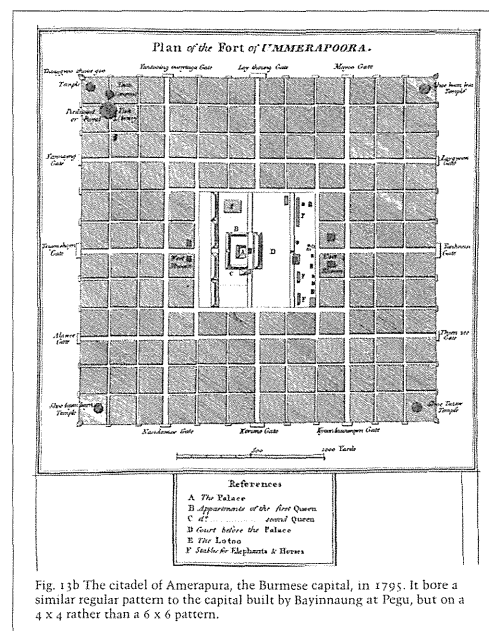


図10 アマラプラ

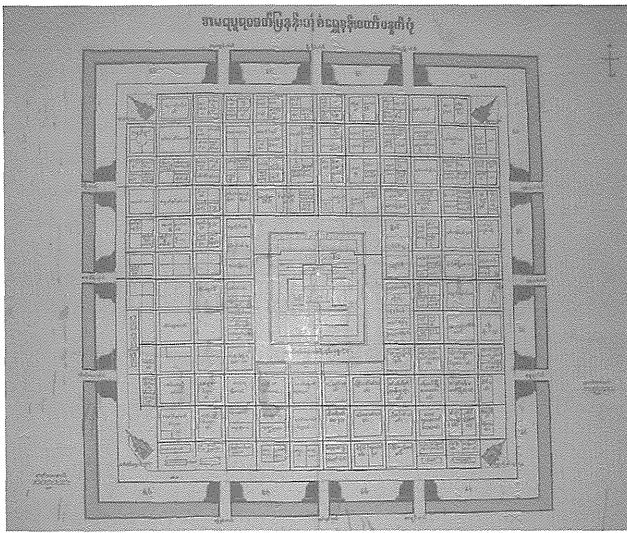


図11

居住の様子をある程度窺うことができる(図I-4-4・15)。

4×4=16ブロックを、東を上、北を左にして北東角を(1,1)、南東角を(1,4)、北西角を(4,1)、南西角を(4,4)のように示すと、パゴダは以上の4隅の他、(1,2)に1、(1,4)に2、(3,4)に1、計8つある。ミンドン王の邸宅は(2,4)、チボー王(王子)の邸宅は(4,3)にあった。女王の邸宅は第1(4,3)、第2(4,1)、第3(3,4)の他、(3,2)(4,1)(4,3)合わせて7ある。西北に集中するのに対して、王子宅は(2,3)(2,4)(3,4)に集中している。

王宮周辺には、高官が居住するが、外国からの賓客を応対する外務大臣は(3,1)、隣接して接待所が設けられていた。通訳はかなり多く、(1,3)に6、(3,4)に4人など13人確認できる。アマラプラは国際都市であった。タイの大使は(2,1)に居住していた。国王の行動を知らせる官房長官は(2,3)、他に法律家、休廷料理人、刑務所などが王宮周辺にあった。その他、占星術師・占い師(1,2)(1,3)、音楽師(1,4)、大工(1,2)なども城内に居住していた。14世紀モン人のハムサワティは三つの地方のそれぞれが32のミョウに分けられていたが、コンバウン朝の王は政治的伝統として32ミョウを意識していたという。

現在、4隅のパゴダは残されているが、他の敷地の大半は軍隊が利用している。

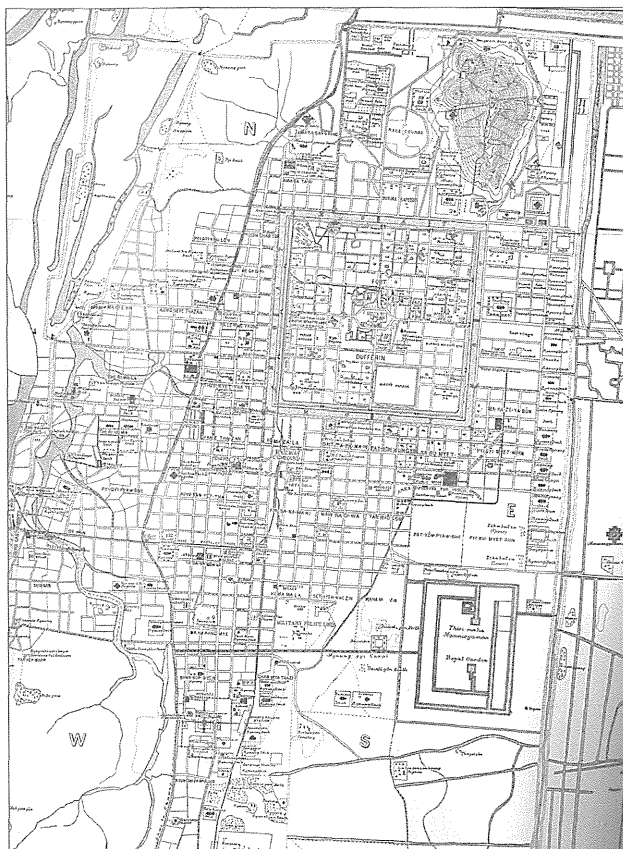


図12 マンダレー

## 6 マンダレー

ミンドン・ミン王は、1853年に王位を継承すると、前首都アマラプラを棄て、1857年に新首都マンダレーの建設に着手する。5人の監督官が指名され、新都建設に伴って15万人が移住したという。

下ビルマへ英国の侵入を許した事態を前にして、新首都は新たな仏教世界のヴィジョンを表すものでなければならなかった。新たな世界は若い仏教徒である王によって築かれなければならなかった。マンダレーという名前は曼陀羅に由来する。宇宙の中心に位置すべきなのがマンダレーである。

しかし、マンダレーは東の間の曼陀羅都市であった。英国はマンダレーを占領(1886年)すると、宇宙の中心としての都市をダフェリン要塞 Fort Dufferin に改造してしまう。要塞は、英軍司令部をはじめ、植民地政府関係の機関で占められ、住民は市の南部に移住させられた。英国は、その後、王宮、城塞、城門などを復元するが、第2次世界

大戦の際、全ては破壊されたのであった。

マンダレーの王宮博物館、またマンダレー博物館に残された地図は極めて明快である。城郭とも綺麗なグリッドによって構成されている。全体は大きく  $4 \times 4 = 16$  ブロックに分割され、さらに各ブロックが  $3 \times 3 = 9$  (ナインスクエア) 区画に分けられて  $12 \times 12 = 144$  区画からなるのはアマラプラと同じである。しかし、最外周の中央に城壁が設けられているから、最外周の区画は半分の区画となる。中央は  $10 \times 10 = 100$  区画となる。その内、中央の王宮が  $4 \times 4 = 16$  区画を占める。

形状、規模について、オコノーは、「完全な正方形で 6,666 フィート四方。城壁の高さは 18 キュービット、555 フィート毎に金色の尖塔をもつ監視塔が設置された<sup>29</sup>。12 の門をもち、4 つの主門は王宮の東西南北に置かれる。」と書いている。また、アウン・ソー<sup>30</sup> は、「城塞は正方形で各辺 10 ファロン<sup>31</sup>。城壁の高さは 25 フィート。12 門が等間隔に配され、ピヤタット pyattat と呼ばれる木造の塔が中間の小塔 32 と合わせて 48 ある。濠の幅は 225 フィート、深さは 11 フィートである。5 つの木造橋のうち、4 つは東西南北の王道に繋がっている。」という。さらに、ディダ・サラヤ<sup>32</sup> は、「城壁は各辺 2,225 ヤード、それぞれ 3 つのポルティコを持ち、中央は正確に東西南北を向いている。市壁に沿って、89 ワ wa(178m) 毎に胸壁が設けられピヤタットが建てられている。市壁は高さ 27 フィート、厚さ 10 フィートである。銃丸は 7 フィートの高さに設けられている。濠は城壁から 135 フィート外側に、幅 250 フィート、深さ 11 フィートである。」という。

各辺の長さ、6,666 フィート、10 ファロン、2,225 ヤード<sup>33</sup> は微妙に異なる。10 ファロンは 2200 ヤードだから 5 ヤード = 4.572m 違うが、2,225 ヤードは 6,675 フィートであり、1 フィートを 30.48cm とすると、ほぼ 2km(2031.8m ~ 2034.5m) である。現在のマンダレー旧城内は軍が使用し、王宮以外は侵入地域となっていて実測ができない<sup>34</sup>。しかし、現行地図、航空写真から各辺がおおよそ 2km であることは裏づけられる。問題は、計画の際にどういう単位を用いたかである。10 ファロンというのは区切りがいいが、6,666 フィートというのは少し不自然である。

29. O' Connor

30. Historical Sites in Burma

31. furlong. 1 ファロン (ハロン) = 220 ヤード yards, 1/8 マイル = 201.17m.

32. Dhida Sarayam, "Mandalay The Capital City, The Center of the Universe", Muang Boran

33. 1 ヤード yard = 3 ft., 0.9144 m.

34. マンダレー旧王城の濠の外側については実測が可能である。

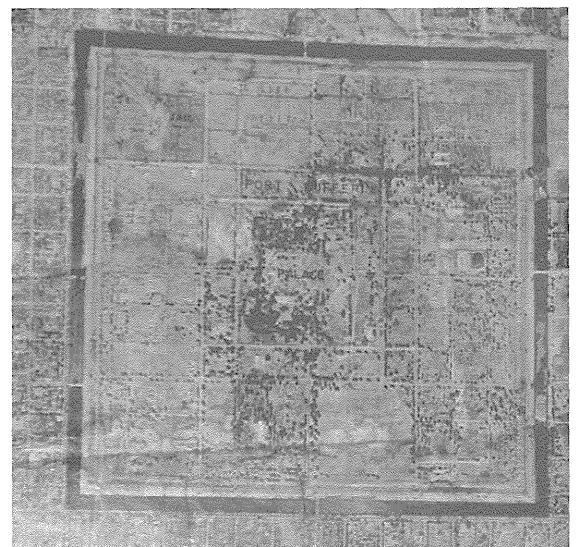


図 1 3

現在ミャンマーで使われる寸法は、英国支配の歴史を受けて、ヤードである。伝統的にラマ rama、ペイ pei、ガイ gai が用いられてきたが、12 ラマ = 1 ペイ、3 ペイ = 1 ガイで、市販されている物差しは 1 ガイ = 915mm であるから、ヤード = 3 フィートとほぼ同じである。

35. ディダ・サラヤの記述に見られるワという単位は、タイでも用いられるが、1 wa = 2m とされている。

別に、タール tar という単位が用いられ、300tar = 約 1km という。1tar = 4gai となる<sup>35</sup>。以上を基に計画寸法を推定すると、図のようになる。重要視したのは王宮博物館に残された模式図である。すなわち、最外周は 1/2 区画となっていることから、城壁内部の規模は  $11 \times 11 = 121$  区画と考える。4 × 4 = 16 のブロックは 600gai (150tar) 四方、各区画は 200gai (50tar) 四方とすると、各辺は 100gai + 200gai × 10 + 100gai = 2200gai となる。街路幅は、航空写真および城外の実測から 60gai と推定できる。

入手できた二葉の地図から、マンダレー城内の居住形態について窺うことができる。分析が今後の作業である。



図 1 4